

友好交流職員 河 俊圭(ハジュンギュ)さん 日本生活レポート(2020.2)

はじめまして。

私は韓国の京畿道（キョンギド）庁から2019年7月26日から2020年7月まで交流公務員として派遣されております河俊圭（ハジュンギュ）と申します。日本に来てから6ヵ月という時間が経ちました。皆さんに私から、韓国、京畿道、研修内容、日本での生活などについて、これから毎月報告しようと思っています。

～自己紹介～

ア. 公務員

【仁川広域市（インチョンクァンヨクシ）、城南市（ソンナムシ）】

私が公務員として働き始めたのは仁川広域市甕津郡（オンジングン）白翎面（ベクリョンミョン）事務所からです。甕津郡は日本の町ぐらいの行政組織で、面事務所は日本の市役所の支所・出張所ぐらいの行政組織です。白翎面事務所は仁川市から船に乗って5時間ほど掛かる島にあり、北朝鮮までの距離が14kmであるため、北朝鮮が目で見え、住民や軍人の数がほぼ同じぐらいで、常に緊張感があるところでした。6ヵ月ほど島で楽しく過ごした後、京畿道城南市に任用され、面事務所を退職しました。

城南市は盆唐（ブンダン）と板橋（パンギョ）という開発都市で有名ですが、この2つの地域に比べて相対的に開発が遅い地域も共存しています。現在、不均衡を解消するため、未開発地域の住居環境の改善を行っています。

城南市で担当した業務の一つが銀行洞（ウンヘンドン、地域名）の住居環境改善事業として、住宅を撤去し、道路と上下水道などの基盤施設を設置する事業です。住民の便宜を図るための事業でしたが、撤去される住宅に居住していた住民たちは、補償金だけで近隣地域に住めなくなったり、外部へ半強制的に移住させるのを見て「一緒に生きていける方法はないか」という思いを強く感じました。

その後、盆唐区の道路管理課で維持管理及び道路掘削許可の業務を担当しました。盆唐および板橋地域は1年に600件以上の道路掘削許可が発生し、それによる多くの苦情も処理しなければなりませんでした。残念だったのは、地下埋設物に対する管理体制が不十分で、工事途中で時々考えなかった問題が発生して復旧のために多くの時間が必要だったことです。管理体制の重要性を改めて感じました。

市民たちと直接やり取りをする現場行政もやり甲斐があり、良い経験でしたが、もっと広範囲の業務に挑戦してみようと、2013年7月、京畿道に転入することにしました。

【京畿道庁】

今考えてみると、担当した業務には開発と修正が共存しています。京畿道庁に転入して、最初に上下水課で農村地域の上水道普及事業と家庭内の錆びた上水道管の交換支援事業を行いました。そして、浄水場を運営する際に、少ない費用でアオコをなくす方法を探す過程で「現答優秀事例」に選定され、水道施設を見学しに初めて来日しました（現答は「現」場に「答」えがあると意味。）。

2つ目の勤務地は、首都圏交通本部でした。通勤のための幹線急行バス（BRT）路線管理および改善工事と水原（スウォン）-ソウルの九老（グロ）間のBRT設計業務を担当しました。

次の勤務地は文化政策課でした。新築の建築物に設置が義務化した美術作品設置制度の運営と文化の殿堂・京畿道博物館などの文化施設の改善するための業務を行いました。1985年から義務的に設置することになった「建築物美術作品制度」は、劣悪な創作環境の改善と市民の文化鑑賞の機会を提供するという趣旨でスタートしましたが、賄賂の慣行や特定の作家及び画廊が独占するなどの副作用によって、制度改善が必要な局面でした。2018年12月、知事の討論会を皮切りに、多くのアーティストに参加機会を提供するための改善策を設けるために、条例を新たに制定し、審査基準を厳しくし、コネクションによって作品が選定されて、設置されることを防いで、公共美術に寄与しようとしてきました（建築物美術作品制度は、新築の建築物を立てる時に、建築費の一定部分ほど彫刻品や絵などを設置すること。）。

イ. 日本語勉強

日本語に初めて接したのは、高校の時でしたが、それは成績のためでした。ですが、日本語の先生が聞かせてくれた“ブルーライトヨコハマ”という歌はたまに頭の中に浮かびます。

語学として日本語を始めたのは、2015年末に日本に水道施設の見学に行ってからです。自己啓発の目的もありましたが、当時、交流公務員制度や学位課程があることを知り、挑戦したいという欲求が生まれました。朝6時30分から開始する塾で、1年半ほど会話の授業を受けながら文法や表現などを習って、交流公務員の申請資格であるJLPT N2を取得しましたが、実際の実力はまだ不足しています。小学校5年生の時、先生が漢字をビシビシと教えてくださり、その時に学んだ漢字が頭中に残っていて、公務員試験や日本語資格試験で漢字の意味を把握するのに大きな助けになりました。

来日前は京畿道庁が支援する外国語の電話授業などを通じて、日本語を上達させようとしてきましたが、語彙や聞き取りの実力は思うように伸びないと感じていました。派遣生活が始まれば、語学の実力向上のために没頭できる時間を持つことができ、スランプを克服できるきっかけになると考えましたが、6ヵ月が経った今でも、外国語が上手になるのは本当に難しいと考えています。

ですが、残りの期間を頑張りたいと思います。

ウ. 交流派遣勤務を希望した理由

日本という国は韓国と文化と民族性は異なりますが、組織体系・政治・経済などの運営方式は似ている点が多く、高齢化社会や住宅問題などを見て、韓国より20年ほど早い時間を過ごしていると感じていました。

日本について、好奇心を持ったのは、八堂湖（パルダンホ：京畿道広州市にある人工湖。ソウルと京畿道の重要な水源です。）のアオコが問題視された2015年「水源管理及び高度浄水処理ベンチマーキング」で、北海道・東京・大阪・京都などに行った後でした。規制一辺の韓国の八堂湖周辺とは異なり、「生態保全と地域発展」を並行している日本の上水源を見て回り、大きな衝撃を受けました。1,400万人が飲み水の水源で使用している琵琶湖の周辺には、工業地帯が集中しており、毎年4,000万人以上の観光客が訪問していますが、1給水の水質を維持できる理由が官民協力の結果であることに気づいたからです。

莫大な予算が伴う新規事業は、これ以上、官主導の下では難しく、都市を再生するという名分で大規模な開発を行うことは、その地域の文化アイデンティティをなくす結果を生み出します。

また、横浜のみなとみらい21やBankART1929の事例を見て、100年以上時代的な違いがある建築物が自然と一体化した都市となったことに驚きました。都市のアイデンティティを生かし、歴史的建築物を活用し、文化芸術の都市になった横浜を作り上げた原動力を知り、日本に興味を持つようになりました（BankART1929は、横浜市が推進する歴史的建造物を活用した文化芸術創造の実現プログラムです。）。